

一九四〇年代の凌叔華

——「中国闺女」をめぐる一考察——

阿部 沙織

一 はじめに

本稿を執筆している二〇〇九年は五四運動九十周年にあたり、反帝国主義・反封建主義を旗印に始まった五四運動のもたらしたパラダイム・シフトに改めて向き合う形で様々な対話と再考が行われた。本稿もまたそのような試みと無縁ではなく、新文化運動の主要テーマのひとつ婦女問題について個別の作品の分析を通し再考したい。

近代をめぐる諸問題の議論が清末に端を発していたことは現在多く指摘されるところであるが、^①婦女問題も例外ではない。戊戌変法の際、梁啓超ら維新派は近代国家建設には女性の国民化が不可欠であるとして、纏足廃止と女子教育を提唱した。^②そのような議論の中、明治日本を倣って女子教育が整備され始め、それまで家父長制の「家」の奥深くに縛りつけられていた女性は纏足をほどこき、社会の中に文字通り飛び出す機会を与えられた。^③（この時期の女子教育は西洋式の教育を取り入れる一方、三従四徳の儒教規範をも固持するものではあったが）清末の変法の中で婦女解放への土壌が形成されたとして、^④婦女問題が次に広く議論されるようになるのは五四期である。五四新文化運動が、西欧の民主と科学により中国を啓蒙し救い出すことを基調にしていたのは周知の通りで

あるが、その西欧近代文明を支えているのは個人主義であることから、中国の家庭・家族本位主義が批判され個人の解放が訴えられることとなった。⁽⁴⁾ その中でイブセンの『人形の家』が紹介され、家から飛び出すノラの姿は二重の意味でこの時代の象徴となった。まず、この時代の全ての青年の理想像として、そして新しい女の理想像として、⁽⁶⁾ このような背景の中、時代に呼応するように登場したのが氷心を始めとする女性作家で五四の理想を文学中に実践した。しかし二十年代には五四新文化運動は下火になり、三十年代には文学界では左翼文学が主流となる。文学・映画の中の女性表象は『革命』の中に収斂されていく。⁽⁷⁾

このような〈新女性〉⁽⁸⁾ 表象の変容についてはすでに指摘されているところだが、本稿が試みるのは、五四期の〈新女性〉言説の中で登場した女性作家の一人、凌叔華がポスト五四の環境の中でいかに女性を表象したかを分析し、五四の〈新女性〉像がどのように継承されたか、あるいは変容したかを探ることである。凌叔華は二十、三十年代に多く短編を発表したがその後は寡作となり、さらには一九八〇年代に至るまで大陸の文学史からは忘れられた存在であった。『再発見』⁽⁹⁾ されて以後は凌作品を巡る研究も進み、近年は基礎的資料も充実してきた。⁽¹⁰⁾ 本稿ではその成果のひとつ、凌の唯一の中篇小説にして、それまでとは異なる政治的テーマを扱った、四十年代の「中国児女」に焦点を当てたい。その成立過程を考察しテクストを分析することで、五四以後の女性表象のひとつのあり方を見出すことができるだろう。

二 五四と女性作家の誕生

先に五四新文化運動の頃の女性作家を取り巻く環境と凌叔華の動向について振り返っておこう。

一九一七年一月胡適の『文学改良芻議』(『新青年』第二卷第五号)に始まった文学革命は民主主義、人道主義

をその基調とし、初期には外国思想・文学の翻訳・紹介により様々な文芸・哲学思想を中国にもたらし、継いでそれらに啓発された創作が盛んに行われた。⁽¹⁾ その中で清末に整いつつあった女子教育を受けた世代が女性作家として登場する。当時「問題小説」で注目を浴びていた冰心と同年生まれで燕京大学の同級生であった凌叔華（一九〇〇—一九九〇）は、冰心から遅れること数年の一九二四年に「女兒身世太淒涼」（以下「女兒」と略⁽²⁾）により作家としてデビューする。この作品については拙稿で「旧式女性」対「新式女性」という形で分断されていた女性たちの間に橋を架けるような視点を凌が獲得していたことを指摘した。⁽³⁾ しかし、一九二八年新月書店から出版された第一作品集『花の寺』には「女兒」は収録されておらず、その理由については当時既に夫となっていた陳源が「序」の中で以下のように述べている。「酒後」以前にも作者は何篇も小説を書いているが、私はその小説技巧はそれほど精鍊されたものではないと感じている。作者も同様の考えにより、それらの作品は収録しなかった。確かに、「女兒」を始めとする初期の作品には、二五年以後の黄金期のような修辭の華麗さは見られず、プロットもステレオタイプを脱していないと見ることもできよう。しかしここで筆者が注目したいのは、「女兒」を執筆するにあたっての作者の意図である。

「女兒」に先駆けること約半年前一九二三年八月二五日、凌は同じ晨報副刊に「読了純陽性的討論的感想」というエッセイを寄せている。これはその数日前の八月一九日の晨報副刊で蕭度（川島）が女性による投稿が少ないことを指摘し女子の覚醒を求めたことに対する、女学生としての反論である。ここでは一にコネが無いと投稿しても採用されがたいこと、二に罵りあいの様相を見せる男性知識人の論争の中にそれらに慣れていない女性が入り込むのは難しいということ、三に男性読者は女性の風流な詩を好み評論を嫌う傾向にあると多少皮肉を込めて指摘している。凌叔華は「女性の代表などとは言えないものの少なくとも女学生の代表として」「謹んで新文化運

動の領袖、或いは先進者に申し上げます、どうぞ決して女子を『前進の意志がなく、詩が詠めれば良いほうで大体は教養とは無縁の』存在などとは見なさないでください。そしてどうぞお見守りください、時には彼女らの成長に手を貸し、皆様の長所を以って彼女らの短所を補ってやってください」と訴えている。表面上は飽くまでも控えめで謙虚な訴えだが、その奥底に新しい時代の女子としての強烈な自負と自意識が横たわっていることが見て取れる。ちなみに同月の農報副刊には他に二編、女性読者による反響が掲載されているが、いずれもただ蕭度(14)に同調するのみで、凌のように具体的に反論し、かつ次代を担う女性としての自負をのぞかせるようなものではない。そしてその数日後の九月一日には大胆にも、当時農報に多くエッセイなどを寄せており五四新文化運動の中心人物の一人でもあった周作人へ手紙を書き「この数年、私は将来女性作家になる決意を固めています。：中国の女性作家は少なすぎるのではないでしょうか、だから中国の女子の思想と生活は今も全く世界に知られていません。これは人類への貢献という観点から見ればまことに無責任だと言わざるを得ません」という決意を語っている。そしてこの手紙がきっかけで周作人に未発表の創作を送るようになり、翌年一月に周作人の紹介を経て「女兒」が農報副刊に掲載される運びとなったのである。

この経緯を見ても明らかのように、凌叔華は自らを新教育を受けた〈新女性〉と認識しており、男性知識人たちから落伍することを潔しとしない気概を持ち合わせていた。三十年代の評論では冰心・蘇雪林が閨秀派作家、丁玲・馮沅君が新女性派作家であるのに対して、凌叔華は新聞秀派作家と位置づけられている。その作風や題材に拠ったものであろうこの分類は、凌作品を有閑階級の暇つぶしであると断ずるような後年の批判に少なからず影響を及ぼしているだろう。しかし右に述べたように作家としての出発点に遡れば凌叔華は五四新文化運動の中の婦女問題にも広く通じていた周作人を文壇への案内人に選んでおり、五四の〈新女性〉像に自らの女性意識を託

していたであろうことが充分にうかがえる。

デビューの翌年、「酒後」の発表により凌叔華は文壇で広く認知されるようになる。⁽¹⁸⁾「繡枕」「再見」「中秋節」は同年の作品であるが、それぞれ「小姐」「職業婦女」「太太」の内面の世界を描き歴史の中に忘れられていた女性の存在を前景化した。が、一九二九年武漢大学に赴く陳源に伴い居を移し社会的活動から遠ざかったことが直接の原因になったのか、創作からは離れ始め、三十年代は出産と育児に伴い子どもをモチーフにした作品を多く発表するものの、戦争の進行とともに寡作となっていく。

三 「中国兒女」の世界

「中国兒女」は一九四二年桂林の『文芸創作』⁽¹⁹⁾に発表された。この作品はいくつかの点でそれまでの作品とは趣を変えている。第一にそれまでの作品が全て一万字ほどの短編であるのに対して「中国兒女」は五万字の中篇である。第二にそれまでの淡々とした描写で人物の複雑な内面を描き出していた作風とは異なり、プロットが重視され人物描写が単純化されていること、第三に以前には殆ど見られなかった政治的テーマが前面に押し出されていることである。⁽²⁰⁾第一の点については、四十年代にはすでに長編が文学の先端となっていた中、凌叔華も長編創作に挑戦しようとしていたと推測できるだろう。第二については初めての長編創作に接してディテールを掘り下げるよりはプロットに頼ったため、第三の点については戦時下という時代の要請で愛国主義的なテーマを選ばざるを得なかったのだろう。このように凌叔華にとっては初めての形式と題材を選んだことから作品には稚拙さも目立ち、この逸文を発見した陳学勇は「作品自体については非常に優秀だとは言えないにしても、当時の小説界において独自の境地を切り開いている」という評価を下している。⁽²¹⁾そしてその独自の点として、当時日中戦争下

の中国大陸は国統区、淪陥区、解放区により異なる政治・社会状況に置かれていたが、凌叔華は母親の葬儀のため淪陥区の北平に一年あまり滞在した経験と、国統区という創作環境を利用して淪陥区の生々しい現状を描き出すことに成功している点(国統区の作家は淪陥区の状態に疎く、淪陥区の作家は検閲により現状を批判的に書くことが不可能であるため、と指摘している)、また敵である日本兵の善良な心を描き出している点を挙げている。⁽²²⁾凌叔華の創作史と照らし合わせると、この後五二年にイギリスで自伝的小説“*Ancient Melodies*”(中文題「古韻」)が発表されるが、これは三十年代後半文通をしていたヴァージニア・ウルフの勧めにより一篇一篇書いてはイギリスに送っていた原稿⁽²³⁾と発表済みの原稿を再整理して出版に至った作品である。そして四十年代以後の創作は殆どが散文であることを考えると「中国児女」が凌にとつて最後の本格的な小説創作ということになる。筆者が興味を持つのは依然としてこの〈新女性〉作家がポスト五四の戦時下にいかにか女性を表象したかである。以下に「中国児女」のテクストを分析したい。

「北平が陥落して二度目の秋、午後の太陽は相変わらず明るく澄んで東城××路を照らしていた……」という書き出しで小説は始まる。李建国と宛英は十二歳と十歳の兄妹で、母とばあやの張媽の四人暮らしである。父は南方に行つたきり消息を絶つている。愛国少年の建国が、班長として同級生を天安門広場に引率し日本軍に対しての慶祝会に参加させるよう校長に命じられ、憤慨して帰宅するところから物語は動き出す。「義勇軍進行曲」を口ずさみ、元教員の王先生も参加する西郊のゲリラ隊に入ることを目標にする建国はこの時代の典型的な人物造型である。日本の憲兵による戸籍調査を名目とした反日分子狩り、財産没収に脅かされる日々の中、城内の治安取締りが厳しくなったことを城外に潜伏する王先生に伝えるため、ある日建国は家を出る。

建国が仲間の徐廉と自転車に乗り、運良く警察の尋問に遭わずに西直門を出たとき、初めてそこに凌叔華のそ

れまでの作品で見慣れた筆致が認められる。

二人が陽気に西直門を出たとき、まだ初春ながら紺碧の空は果てしなく広がり、空の端の西山は朝霞みをまとって高々と居並び、地上の平原には大樹の茂み、農家、高粱の茎で作ったまがきの中の青々とした菫、門の外には赤い服を着た小さな女の子、黄色い牛、黒い犬が点在して見える。もうしばらく進むと古い柏の林が広がり、その手前には本殿と経堂を備えた荘厳な寺院がくすんだ赤い壁に囲まれ、はるか向こうの僧林には頂きに小さな木を生やした雷峰塔のような古塔がのぞいている。

田んぼの横の小川は暖かい陽の光に照らされて、薄氷は破れさらさらと流れている。道端の柳には雀が三々五々行ったり来たり……

画家としても活動していた作者の面目を躍如する、詩的な春の俯瞰図は一九二五年の「花の寺」を彷彿とさせる。物憂げな春の気配の中、謎めいた手紙に誘われて詩人が訪れたのも、西郊の寂れた寺だった。ここまで、北平城内で物語が進行している間は一切このように叙情的な描写がなされていなかった。度々戒嚴令が敷かれ、日本軍に空間を支配され思うままに移動も出来なくなっていた城内から身体が解き放たれた時、テキストにはこのような光景が立ち現れる。それは凌叔華にとっては五四期の青春の残影であつたかもしれない。城外の世界は、建国にとつては尊敬する王先生が居る場所であり、ゲリラ隊の拠点であり、また「自由中国」につながる通過点でもある。あるいは、この西郊の風景そのものが「中国」のメタファーになっていると読むこともできよう。

この後、建国は王先生の潜伏する村に辿り着き、財産の掠奪に訪れた二人の日本の憲兵と通訳の中国人を殺害する計画に村人と共に加わり、その後建国の姿はテキストから消える。

凌叔華はかつて子どもを題材にした作品を取めた『小哥兒倆』（上海良友公司 一九三五）の「自序」で、作品

中の子どもたちは「私の心にいつもいるエンジェル」で「幼い頃の美しい夢は今も恋しく、すべての子どもたちの喜びと悲しみに対して興味と同情を持っている」と述べている。だが「中国児女」の中の兄妹は、それまでの「小哥児倆」（一九二九）や「一件喜事」（一九三六）といった作品に描かれた子どもたちと年齢はそう離れていないものの、両親の庇護のもと大人とは違う世界で無垢に生きるそれらの「子ども」とは全く異なる存在である。

建国が消えた後もう一人の主人公としてクローズアップされる宛英は十歳の少女である。「赤い頬と黒い瞳を見れば彼女が無邪気で賢い子どもと分かる」と幼い少女としてテクストに登場しながらも、王先生に対して「抗日のため全民族の精神を総動員すべき時だから、私も国のため何か役に立つことがしたいんです……私も国民の一人でしょう？」と訴える姿は、家族の庇護の中で「美しい夢」を見ていられる子どもという立場と決別し、大人と変わらない一人の国民としてありたいという国家への従属願望を表している。そして、兄や友人に「女学生は一日中べちゃくちゃお喋りをしているし、力仕事もできないのだから」ゲリラ隊に加われないと言われると、「あなたたちはいつもそうやって女子学生のことを馬鹿にする……」と怒り、「声が震え」るほど一気に反論する情熱は、先に挙げた凌叔華のデビューに先駆けたエッセイや手紙の中の女性としての自負とは重なるようでいて、異質なものである。凌叔華のそれは、女性意識の表現が「人類への貢献」につながるというものであった。それに對し、宛英のこれらの発言は「敵に追われた時、女学生は素早く逃げられない」という兄に對し「男子学生なら、みんな気力があるっていうの？」と反論し暗に女学生も男子学生なみのことは出来ると主張しているように、規範となる男性ジェンダーに自らの女性ジェンダーを同化させることを望むものである。

その後母は戻らない建国を探しに家を出て、やはり姿を消してしまふ。最後に残された娘の宛英は戸惑い、泣きながらも親戚を頼って母の消息を尋ねるが、日本側と接触の多いこの親戚は日本側への心づけと称して宛英の

家の財産を毫り取っただけで何の助けにもならなかった。宛英の苦境を救ったのは他でもない日本人の憲兵、広田だった。娘に似ている宛英に同情し、収容所に宛英を案内し母の救出に一役買ったのだ。母は戻ったものの兄の建國は未だに行方が知れない。嘆き暮らす母を見て、宛英も家を出る決心をする。そしてテクストは以下のよう幕を閉じる。

大好きなお母さん

この手紙を見ても、どうぞ慌てて誰かに私を探しに行かせたりしないでください。私は兄さんを探しに行くて決めたんです。私みたいな子どもを殺したり、虐めたりしようとは誰も思わないはずだから、何も危険なことはありません。安心していてください。お母さんが居なくなつてから、どうやって世の中を渡つていくのか少しは学びました。私はもう小さな女の子じゃありません。私と兄さんは何日か後に必ず大好きなお母さんの元に戻るから、安心してください。絶対に私たちを探しに人をよこさないで下さい。身体に気をつけて、さようなら、お母さん。

(中略)

この手紙を何回も読み返すうちにお母さんの目には涙が溢れ、机に突つ伏してむせび泣いてしまった。

「家を出る娘」というこの構図には、五四の時期に何度も見た家を出るノラの姿がオーバークラップする。しかし同じ「家を出る娘」であっても、五四の時期に個人の解放を求めて封建的家庭から飛び出した娘達と宛英は根本的に違っている。宛英が家を出るのは兄を探すため、としているが宛英もまた兄が姿を消した西直門の外の世界へと飛び出し、「中国の子」となることを望んでいるのだ。四十年代の国統区文学・解放区文学に共通する特徴として常彬は「無意識的にある種の集合的あるいは総体的な権威に従属し、またそれらの総体性と相容れない遠心

力を持つもの、例えば個人の生存、個性の意義、非大衆性、非集合性、ジェンダー意識：（中略）：等を無意識的に排斥し、文化構造の周縁へ押しやるか見えない背景にしてしまう⁽²¹⁾ことやその「脱性化」⁽²²⁾を挙げている。凌叔華のデビュー作「女兒」の中で、旧式家庭の中で苦しみながらも立ち上がるうとする主人公の名が「婉蘭」であつたのに対し、「中国兒女」の主人公の名が「女」という字を取り去つた「宛英」であることは示唆的と言えなくもない。幼い兄妹が家を出て抗日戦争に参加するという結末は、「抗日戦争は有史以来の偉業であり、詳細に歴史に記載し、偉大な文学に表現せねばならない」という掲載誌の理想⁽²³⁾には適うものであつたと言える。しかしながら、それまで凌叔華の筆によつて現れた女性の内面世界や、大人の矛盾した世界とは距離を置き、そこに無垢な視線を注ぐ子どもたちの世界がもはや存在する余地がないことに、痛ましさを感じずにもいられない。それは、あるいは最後涙する母親の姿に喚起されるものであろうか。

凌叔華の伝記的事実に照らせば、三五年凌は武漢大学に英文学を教えに来たジュリアン・ベルと出会い、五四の「恋愛至上」の教えを実践するかのよう⁽²⁴⁾に家庭から飛び出し恋愛関係を持つ。しかしベルの戦死に遭い、それがきっかけでベルの伯母ヴァージニア・ウルフとの文通を始め、戦火の中ウルフに励まされ自伝を書き続けた。文壇が抗日と民族救亡のテーマ一色となる中、凌叔華が選んだのは自伝という極めて個人的な創作形式だつた。それは凌叔華にとつて、それまで書き続けてきた個人的な物語||小さな物語を以つて大きな物語に対抗する意味があつたのかもしれない。

長引く戦争、迫る砲火や累々とした屍に絶望しかけていた凌叔華にウルフは、自分ができる唯一のアドバイス、そして同じく戦争の影の濃くなるロンドンで自身にも課していることは“to work”——書くこと——である、と返答している⁽²⁵⁾。その言葉はこの時代に生きる作家にとつて大きな支えになつたに違いない。しかし四一年にはその

ヴァージニア・ウルフが自殺している。大変動の時代、絶え間ない戦火の中、〈新女性〉作家として女性の個人的な体験を書き綴る決意はここで折れてしまったのだろうか。翌四二年にこの「中国児女」で彼女がこだわり続けていた「女兒」―娘としての存在を「中国」―国家に還元せざるを得なかったことに、動乱の時代における女性の生存への深い苦悩を読み取ることも可能だろう。すでに戴錦華が指摘しているように「きわめて残酷で長期にわたったこの侵略、反侵略戦争、全て国民国家の名において女性の身体及び生命を侵害し、徴用し、搾取したこの戦争においては、「新女性」のようなテーマは確かにあまりにぜいたくなものであった⁽²⁸⁾」のだ。

四 おわりに

以上のように、「中国児女」は二、三十年代に極めて意識的に女性の生存を描いていた〈新女性〉作家凌叔華が、戦争のもとで向き合った困難を我々に示している。これ以後凌叔華が小説を創作していないことを考えると、それは相当な深刻さを伴ったものであったことが窺えよう。

凌叔華自身は五四の華やかな北京文壇から日本、そして武漢、大後方の四川・乐山と流浪した後、解放前にロンドンへ出たまま祖国に戻ることはなくさらに南洋、カナダを経てその人生最後の数ヶ月に北京に戻り死を迎えるという数奇な一生を辿った。あるいは作家の生涯そのものが五四の〈新女性〉のひとつの実践とも読めるかもしれない。一九二四年のデビュー作「女兒身世太凄凉」から一九八四年最後の作「一個驚心動魄的早晨」に至るまで凌は一貫して時代の変化の中で女性の生存を冷徹に描き続けて来た。二、三十年代の作品が論じられることの多い凌叔華であるが、本稿では言及できなかった自伝『古韻』も含めてそれ以後の作品の中でいかに女性表象が変容したかを辿ることは今後の課題としたい。⁽²⁹⁾

それは正に魯迅の「ノラは家を出てからどうなったか」⁽³⁰⁾を女性文学の中に辿る試みとなるはずである。

注

- (1) 『被压抑の現代性——晚清小説新論』王德威 北京大学出版社 二〇〇五 「導言・没有晚清，何来『五四』」
- (2) 『中国民族主義の神話』坂元ひろ子 岩波書店 二〇〇四 三〇—三十一頁、一七三—一七六頁
- (3) 『晚清女性与近代中国』夏晓虹 北京大学出版社 二〇〇四 「第二章 新教育与旧道德」
- (4) 『五四運動史』周策縱 岳麓書社 一九九九
- (5) 『新青年』第四卷第六号(一九一八)「イブセン特集」の中で、羅家倫・胡適の翻訳により「娜拉」の題で掲載された。
- (6) 『東アジアの良妻賢母論』(双書ジェンダー分析十二 陳延濤 勁草書房 二〇〇六)「第六章 新女性イメージの創出」において『婦女雜誌』を中心とする当時のメディア記事から丹念に〈新女性〉イメージの作り出される過程を掘り起している。本書によれば、最初は女性解放の象徴として中国にやってきたノラは男性知識人たちにより、男性も学ぶべき姿、個人解放の象徴として受容されていったという。
- (7) 『中国映画のジェンダー・ポリティクス』(戴錦華 御茶の水書房 二〇〇六)第一章「女」の物語 激変する歴史」の中で五四期の家を出るノラの表象に死が告げられ、三十年代の左翼映画の文脈の中で労働女性が新たな新女性として祭り上げられる過程が詳述されている。
- (8) 本稿では一九世紀末期のイギリスに出現した「New Woman」という表現を起源に、中国で現れた「新婦女」「新女性」「新女子」「新式女子」などの表現を、〈新女性〉と統一して表記している。中国近代における「新しい女性」像の変遷については、江上幸子氏が抗日戦争前の「新婦女」を「賢母良妻」期、「ノラ」期、「職業婦女」期、「摩登女郎」期、「労働婦女」期と細分化して考察している。(現代中国的「新婦女」話語与作為「摩登女郎」代言人的丁玲 二〇〇六) 本稿ではこれらの女性を「人形の家」のノラを共通のバックボーンに持つ一連の「解放された女性」像ととらえ、その共有する問題を俯瞰して論じるためにも〈新女性〉という表記を採用した。

(9) 『中国現代小説史』(楊義 北京人民文学出版社 一九八六)が解放後の大陸で初めて凌叔華を文学史の中に取り上げた。「凌叔華の小説は写実的心理描写に、透き通った性質を備えている。……彼女は繊細に女性の心を描き、その表現には憂いや苦しみを含みながら、常に優雅で淑やかである。彼女は社会の不平等や人生のわだかまりを描かなかったわけではなく、より巧妙な視点を選ぼうとした。つまり女性のやさしき、子どもの幼さをもってそれらをより純粋に、淡泊に、柔軟に表現したのである」また、『浮出歴史地表』(孟悦・戴锦華 河南人民出版社 一九八九)は「第五章凌叔華・角隅中の女性世界」において初めてフェミニズム批評の観点から凌叔華の作品に評価を加えた。日本においては「凌叔華——人と作品」(飯島容、中央大学文学部紀要一〇六号、一九八三)が凌叔華研究の先駆けとなっており、この研究は晩年の凌叔華本人にも認知されている。

(10) 『凌叔華文存 上・下』(陳学勇編 四川文艺出版社 一九九九)により散逸していた凌叔華の小説・散文・書信が全面的に俯瞰できるようになった。さらに『中国児女——凌叔華逸作・年譜』(陳学勇編 上海書店出版社 二〇〇八)により、前掲書に収録されていなかった作品も目の目を見ることがとなった。本稿での凌叔華作品の引用はこの二冊に拠る。その他に『丽莉 布瑞斯珂的中国眼睛』(原著“Liby Britcoe's Chinese Eyes”1100111 P. Laurence 著 万江波等訳 上海書店出版社 二〇〇八)は凌叔華が一九三五年武漢大学に赴任してきたジュリアン・ベルと交わした書信を元に二人の間の恋愛を掘り起こしただけでなく、イギリスのブルームズベリーグループと中国の新月社の文化交流を立体的に描き出している。『家園夢影——凌叔華与凌淑浩』(魏淑凌 百花文艺出版社 二〇〇八)の著者は凌叔華の妹、凌淑浩の孫にあたり、凌家の二姉妹の辿った道から近代中国に於ける二つの新女性像を浮き彫りにしている。また『散落的珍珠』(陳小滢 百花文艺出版社 二〇〇九)は凌叔華の一人娘による回想録で凌叔華の交友関係や伝記的側面を補強する資料が多く紹介されている。

(11) 『中国現代文学三十年(修訂版)』錢理群 温儒敏 吳福輝著 北京大学出版社一九九八「第一章文学思潮与運動(一)」

(12) 『晨报副刊』一九二四年一月十四日

(13) 拙稿『〈新女性〉の死——凌叔華「女兒身世太凄凉」をめぐる』お茶の水女子大学中国文学会報 第二十七号 二〇〇七

(14) 「説」純陽性的討論」後の感想」問嶋（一九三三年 八月二六日）「我看了純陽性的討論的感觸」協中（同年同月二九日）
いづれも『晨報副刊』

(15) 「几封信的回憶」周作人 一九六三 『知堂集外文「亦報」隨筆』岳麓書社 一九八八 所収

(16) 「几位当代中国女小说家」殺真『当代中国女作家論』黄人影編 光華書局 一九三三 所収

(17) 早くには賀玉波『酒後』作者淑華女士（『中国現代女作家』一九三三）において「作者の創作に対する態度は嚴肅さに欠けている。なぜなら彼女は有閑階級の夫人であり、退屈、軽薄、滑稽、冗談の悪習に染まっているのだ。そしてこのような悪習は彼女の作品の中に存分に見て取れる」と批判されている。また現代においても同様の批判は繰り返されている。

(18) 「酒後」は一九二五年一月十日『現代評論』第一卷第五期に発表された。直後の一月十九日、『京報副刊』上で周作人は「現代評論」にて叔華先生の小説『酒後』を読んだが、非常に良いと思った……と評価している。凌叔華自身は晩年、自分が作家として注目を浴びることになったのは『酒後』が日本で『改造』現代支那号・夏季増刊（一九二六年七月六日）に掲載されたことが大きく、その後も一定の評価を受けたのは、魯迅が『中国新文学大系・小説二集』導言（一九三五）の中で『酒後』について言及したことが大きいと述懐している。（鄭麗園「如夢如歌——英倫八訪文壇耆宿凌叔華」『聯合報』一九八七年五月六日、七日）

(19) 熊佛西主編 文芸創作社発行 「中国兒女」掲載は第一卷第一、二、三期と第二卷第四期

(20) 「等」（一九二六）は三一八事件を背景にしているが、それも正面から描いておらず「中国兒女」とは手法に差がある。

(21) 前掲陳学勇二〇〇八 二頁

(22) 前掲陳学勇二〇〇八 二頁

(23) 前掲 P. Laurence 二〇〇八 三七五〜四二九頁に二人のやり取りが詳述されている。

(24) 『中国女性 文學話語流變』常彬 人民出版社 二〇〇七 三〇五頁

(25) 前掲 常彬二〇〇七 三〇七頁 原文は「去女性化」他にも『革命与情愛——二十世紀中国小説史中的女性身体与主题重述』（劉劍梅 上海三聯書店 二〇〇九）二三四頁で、革命期中国婦女の研究においては、国家や党をめぐる言説に

取り込まれた女性が主体性と女性性を失い、無性化あるいは中性化するといふ認識で基本的に合致していることを踏まえつつ、さらには女性が私的領域では女性性を強く求められる傾向も指摘している。

(26) 『文芸創作』第二巻第四期 一九四三年十月 巻頭辞「我們需要表現抗戰生活的長編小説」

(27) 一九三八年四月五日ウルフの凌叔華宛て書信 “The letters of Virginia Woolf” New York: Harcourt Brace Jovanovich

一九八〇 二二二頁

(28) 前掲 戴錦華二〇〇六 四一頁

(29) ここで小説『K』（虹影 台湾出版社有限公司 一九九九）に言及するのは妥当かわからないが、新女性表象としての「凌叔華」の受容という面では興味深い「事件」である。小説はジュリアン・ベルと凌叔華の「婚外恋」を題材としているが、赤裸々な性描写に遺族が訴訟を起こすという顛末はともかくとして、凌と同様長くイギリスに滞在する華人の作者が中国人女性を相伝の閨房術を駆使するミステリアスな存在として描いたことは、方向性は違えど西洋にあって「中国」イメージを創造する時凌叔華が『古韻』において「古い」中国を描かざるを得なかったことと図らずも呼応している。深い。新・旧の交代する大変動の時代の中で女性を書くことに深く思いを巡らしてきた凌の実践は、二十一世紀の今でも決して古くはない問題であることの証明でもあろう。

(30) 「ノラは家を出てからどうなったか」 魯迅 『墳』一九二七

(あべ さおり お茶の水女子大学大学院博士後期課程)